

【スッポンを作るための塩ビパイプを切る著者】



し」もなければエサもない。両側が開いている、ただの筒を使う。この筒の束を沈めておいて、ウナギがそのなかで休んでいるところを、そっと引き上げて捕まえる。タコつぼの中に入れて休んでいるタコを、つぼを引き上げて捕まえるのと同じ仕組みだ。

この道具を使うと、ウナギが食べているエサを調べることができる。ウナギがエサを食べた後に、筒のなかで休んでいるところを捕まえるからだ。はえ縄ではそうはいかない。はえ縄という方法は、釣りと同じようにエサを使うので、空腹のウナギしか捕まえない。しかも、捕まえたウナギ

はエサのアナジャコを食べた後だから、そのウナギがふだんは何を食べているのか、知ることができない。

これに対してスッポンには、自分で探し出したエサを食べて、満腹になったウナギが休みに入ってくるはずだ。このウナギを捕まえてお腹の中を調べれば、ウナギがふだん何を食べているのか知ることができる。このような理由から、ウナギを捕まえる漁具として、スッポンを選んだ。

筒に使ったのは直径五センチ、長さ一メートルの塩ビパイプ。このパイプを三本、ロープでまとめて一セットとする。三十セットを五メートル間隔で太いロープにくくりつけると、一組の「スッポン」のでき上がりだ。調査のために作ったスッポンは、一組がおよそ一五〇メートル。これを八組作った。口で言うのは簡単だが、四メートルの長い塩ビパイプを切って、一メートルのパイプを七百二十本作るころから始める。切ったパイプを三本ずつロープでまとめ、一五〇メートルのロープに結び付けていく作業は、なかなか大変だった。何人もの漁師さんや、研究室のメンバーに手伝ってもらって、ようやく完成し、旭川や児島湾に設置したのは、二〇〇七年八月。初めて岡山を訪